

学生卒業設計制作NCF空間ディスプレイアワード受賞作品

受賞年	2023年								
受賞タイトル	優秀賞								
区分	Ⅳ. 都市ディスプレイデザイン								
フリガナ	ハシモト アユカ								
制作者名	橋本 歩佳								
フリガナ									
卒業時の大学 学部・学科	京都女子大学 家政学部 生活造形学科								
フリガナ	ノグチ キヨシ	職名							
推薦者名	野口 企由	家政学部 生活造形学科・教授							
フリガナ	ヒトとヤセイドウブツのキョウゾンというカダイにムけたチュウサンカンチイキのテイアン								
作品名	人と野生動物の共存という課題に向けた中山間地域の提案								
概要	 <p>人と野生動物の共存という課題に向けた中山間地域の提案</p> <p>site.01 里山エリア 里山 site.02 里山エリア・バッファゾーン site.03 人里エリア site.04 観察エリア site.05 順応化エリア</p> <p>01 背景 私たちが人間が、急激な都市化や工業化によって自分たちの生活を優先し、自然そして野生動物を除外しながら狭してきた結果、野生動物の生息域が縮小され、食糧を求め人里に現れ、被害を加えるといった問題が起きている。本来野生動物はとても健康な生き物で、人間の生活域に危険を伴いやつてくことは、昔はほとんどなかった。生物多様性の維持という地球規模の課題から考えれば、人と野生動物の共生は避けられないテーマであり、緩衝帯としての役割を担うべき「中山間地域」に、両者の距離を適度に確保するためのアプローチを行い、適切に整備することが重要である。</p> <p>02 野生動物による被害</p> <table border="1"> <tr> <td>農作物被害</td> <td>森林被害</td> <td>人的被害</td> </tr> </table> <p>過疎化や少子高齢化といった社会・経済的基盤の変化が著しく進み、里山の田畑や山林に人の手が入らなくなった。そのため、草や竹がふさぎ茂り、人間が暮らす平野と野生動物が棲む山間地の中間の境界線がぼやけてしまったため、動物の隠れ家が増えてしまう。</p> <p>03 中山間地域ー里山の現状</p> <table border="1"> <tr> <td>木材・竹の代用品の使用</td> <td>都市部への人口集中</td> </tr> <tr> <td>高齢化による管理者不足</td> <td>薪炭の需要減少</td> </tr> </table> <p>高度経済成長以降の産業構造の変化とともに、里山の関わり方が変化した。人と里山のつながりは途絶え、人は山にも入らなくなったため管理が行き届かず、農地や森林の荒廃が次第に進んでいった。棚田は耕作放棄が進み、森林も手入れが行き届かず、被害に悩まされている地域が多くなっているのが現状である。</p> <p>04 人と野生動物の共存を実現するための空間形成に関する考察と目的 里山を人工的に再生することは、人と野生動物、そして自然環境が共存するための近道であると考えられる。人間の生活域において被害を与える野生動物との間に適切な境界領域を与えることによって、野生動物の住処として、また人と野生動物の距離を保った共存を実現する住・緩衝帯の役割を担うべき環境として作用させることを目的とし、その具体的な設計提案を行う。野生動物による被害を防ぐと同時に、適切な距離をとりながら動物を身近に感じることが、人が持つ野生動物への偏見・無関心を取り除くことに繋がる。この一見矛盾するようにも思える関係が人と野生動物が共存するために必要であり、野生動物に対する興味・関心を持ちながら共有できる住環境形成につながるのではないかと考察する。大きく捉えれば、生きた動物たちと出逢い、みんなそれぞれにちがういのちが共にある世界とはどうあるのがふさわしいものなのかを常に考えさせられる地域環境の提案である。</p> <p>05 敷地選定</p> <p>本研究の敷地である福井県敦賀市正田は、 ①獣害とよばれるツキノワグマ、イノシシ、シカなどが存在している ②以前、里山として活用されていた地域であり、田んぼや畑、樹園で埋め尽くされていた土地は、人の手が入らなくなり、耕作放棄地となっている。 ③人里には空き家や遊休地が点在しており、利用できる土地が存在しているといった状況である。 この敷地状況から里山エリアでは「里山の再生・管理・バッファゾーン形成」、人里エリアでは「メカニズム構築」といった3つのエリアに分けて計画を行う。</p> 		農作物被害	森林被害	人的被害	木材・竹の代用品の使用	都市部への人口集中	高齢化による管理者不足	薪炭の需要減少
農作物被害	森林被害	人的被害							
木材・竹の代用品の使用	都市部への人口集中								
高齢化による管理者不足	薪炭の需要減少								

制作者名	橋本歩佳
作品名	人と野生動物の共存という課題に向けた中山間地域の提案

【コンセプト解説】

日本は温暖な気候に恵まれ自然豊かであり、世界の先進国の中では唯一、大型の野生動物が人のそばで暮らす国である。そんな日本で近年、野生動物の生息数や生息地域の変化により、里山では住宅のすぐ近くや田畑にまで、イノシシやシカ、クマなどが現れるという危険な接近事態が起きており、野生動物をあたかも「人間の敵」のように扱う報道がある。農業被害や人的被害、いわゆる「獣害」が多発して以来、人と野生動物はどのように付き合っていくべきかという議論が活発にされるようになってきた。

しかし、「野生動物と共存する」というテーマはそう簡単に答えが出るようなものではない。なぜなら、私たち人間は、急激な都市化や工業化によって自分たちの生活を優先し、自然そして野生動物を除外しながら接してきたからである。その結果、野生動物の生息域が縮小され、淘汰のアンバランスで個体数が逆に増加したり、食糧となる動植物の生殖系が破壊するなどという問題が起きている。本来、野生動物はとても臆病な生き物で、人間の生活域に危険を伴いやってくることは、昔はなかった。一番の被害者は野生動物だということに、野生動物をあたかも「人間の敵」のように扱う考え方が、当たり前のように定着してきた。しかし実は、獣害問題とは、私たちの身勝手な生き方をうつす鏡であり、人間活動による動物に対する弊害の一つと捉えて解決すべき問題なのである。

その一方で、野生動物に無関心という問題も存在する。本来動物を身近に感じて暮らしてきた日本人が、都市生活をするようになったことで、人と野生動物の距離が急激に広がり、野生動物に無関心になっているのである。一つ例を挙げると、日本で有名な野生動物といわれる奈良公園のシカである。あののんびりとした印象のシカは個体数増加により、実際に農林業被害だけでなく、植生破壊に深刻な被害を及ぼしている。平成26年のデータによると、シカによる奈良県全体の被害金額は5374万円であり、この実態が何十年も続いている。また、令和3年度には、シカは全国で約72万5000頭が捕獲されている。しかし、多くの人はその実態を知らず、捕獲しなければならない理由も理解しているとは思えない。都市化する一方で、動物の実態が捉えられず、それだけ現代の日本社会が動物に接する機会を失っているのではないだろうか。

野生動物との予期せぬ遭遇は、農業被害や人的被害を生むだけでなく、駆除の必要性が高まり、両者にとって良くない結果を生じる。それを阻止するためには、まず私たちが適切な対策、野生動物の知識をつけることが必要である。

そこで、本研究ではバッファゾーンとしての役割を担う「中山間地域」に着目して、両者の距離を適度に確保するための新たなアプローチを提案する。野生動物の生活圏を開発、利用し続けてきた人間が、野生動物の生態を研究・分析し、共存できる長期計画を試行錯誤することによって両者の調和という課題を徐々に実現できるのではないかと考える。かつて人間と野生動物の境界線である里山を人工的に再生するとともに、街に点在する住宅間の「スキマ」を動生物の道として利用することで、人と野生動物の新たな共存の在り方を提案することが本計画の目的である。

